

Vol.
27&28

人社研 Newsletter



2011（H23）年度
後半期博士学位取得
（社会文化科学研究科及び
人文社会科学研究科後期課程）



2012（H24）年度
前半期博士学位取得
（社会文化科学研究科及び
人文社会科学研究科後期課程）

目次

巻頭辞	2
2011年度後半期及び2012年度前半期学位授与式	3
2012年度新規科目担当者	4
科学研究費（新規）プロジェクト	5

所属教員による出版物	6
博士後期課程修了生による出版物	7
博士後期課程修了生の研究業績	7
博士後期課程大学院生の受賞・助成金	8
博士後期課程大学院生の研究業績	8

グローバル化時代における人文社会科学研究科の進路

人文社会科学研究科長 中川 裕
(兼・社会文化科学研究科長)

2012年度は、全国的に「大学改革」という言葉が席卷した年だと言えます。特に「グローバル化」ということがさかんに強調されました。千葉大学でも今年度文部科学省の「グローバル人材育成推進事業〔全学型〕」に採択され、全学を挙げてその事業に取り組んでいます。それを受けて、人社研では次のようにさまざまな企画が立案され、実行に移されました。

- ・「グローバル化と海外における日本語教育セミナー」2013年1月25日、2月1日

日本語教育関係の先生方を中心として、韓国・オーストラリア・ベトナムから専門家を迎え、現地における日本語教育の現状を学ぶセミナー。

- ・「中央民族大学との共同による、博士前期課程学生の日本語教育専門家養成プログラム」2013年3月9－16日

日本語教育学を学ぶ博士前期課程の学生2名を、北京の中央民族大学に派遣し、同大学の日本語専攻学生に対して、日本語の教育実習を行った。

- ・Conference on “Socioeconomy and Institutional Arrangement”, 2013年3月11－12日

千葉大と協定関係にあるインドネシアの6つの大学から教員を招いて、経済学の新しい方向性を探るための情報交換と討論を行った。

- ・「グローバル時代の公共研究を目指して～過去と現在～」2013年3月15、18、21、27、29日

公共学の先生方が中心となって、政治学、政治哲学、国際関係論の世界的な研究の最前線に触れるべく、各国の著名な海外研究者を招いて開いた連続公開セミナー。

- ・「シンポジウム：湖南大学と千葉大学の人文社会科学における教育研究交流」2013年3月26－27日

長年の協定校である湖南大学との学生交流を、経済学・経営学・法学といった社会科学の分野でも展開するために、お互いの研究・教育体制について情報交換を行ったシンポジウム。

これらのイベントはすべて予想以上の成果を上げることができ、来年度以降人文社会科学研究科が構造的な変革を行って、さらに研究・教育の両面で発展を遂げるためのきっかけづくりを十分に果たしたと思います。

ただ、ここで考えておかなければならないのは、「グローバル化」というのはそもそも何かということです。そのいちばん根幹となるのは「自分の活動範囲を日本の枠の中で完結させない」ということだと思います。研究活動に关していえば、自分の研究成果は人類の共有財産なのであるという意識を持つということ、単に英語ができるとか、海外に何度も行ったことがあるというようなことは、それを遂行するために要求される副次的なことにすぎません。もちろん、英語ができないよりできたほうが、海外進出に有利なのは間違いありませんし、できないと困ることも多々ありますが。理工系に対して、人文社会科学、とくに人文系ではそういう意識を持ちにくい分野も少なくないと思いますが、単にグローバル化という言葉に踊らされるのではなく、自分の研究の社会的な意義をしっかりと見つめるということ、この「大学改革」の流れの中で考えていきたいと思っています。

2011（H23）年度後半期学位授与式および修了者祝賀会

2012年3月27日、文学部棟2階203講義室において学位授与式が行われ、以下に掲載する2名の方が社会文化科学研究科を修了して学位（博士）を、4名の方が人文社会科学研究科博士後期課程を修了して学位（博士）を、2名の方が論文提出により学位（博士）を、67名の方が人文社会科学研究科博士前期課程を修了して学位（修士）を取得されました。

また、学位授与式後、千葉大学生生活協同組合カフェテリアにおいて修了祝賀会が催されました（右写真）。



2011年度後半期社会文化科学研究科修了者（2012年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
呉 志剛	中国語標準語における2音節語のピッチの物理的特徴について	博士(文学)
森 佳三	アルトゥーロ・マルティニ『観想』の造形性の意味	博士(学術)

2011年度後半期人文社会科学研究科後期課程修了者（2012年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
阿拉騰其木格	「沙漠」の緑化・開発の現実と土着知識－内モンゴル自治区ダラタ旗のエンケイブイ(恩格貝)「沙漠」産業開発モデル区を事例に－	博士(学術)
王 冰菁	日中接触場面と日本語母語場面の会話における人称表現の生成と管理	博士(学術)
金沢 佳子	少子高齢時代の世代間継承－「家」と家族と個をめぐる社会学的考察－	博士(学術)
吉尾 博和	シュンペーターの経済社会学－内生的進化の体系－	博士(学術)

2012年度後半期人文社会科学研究科論文提出による学位取得者（2012年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
伊藤 幹	現代健康教育における熱中症予防対策の重要性と飲用アルカリ性電解水摂取の有用性に対する検討	博士(学術)
李 大基	李箱「終生記」－李箱作品の集大成－	博士(文学)

人文社会科学研究科博士前期課程学位（修士）取得者（2012年3月）

飛田 清佳	崔 英才	高橋 莞爾	中村 剛	池田 健雄
尹 美花	于 成瑤	袁 帥	加藤 大揮	小林 嵩
佃 竜太	伊藤 祥	馮 英華	松沼 理恵	劉 真
千葉 文美	鈴木 翔太	十河 昌平	中川 雅智	別府 大樹
高池 慶太	山崎 久之	加藤 貴典	澁谷 知之	周 思元
蘇日娜	田所 康穂	DANILCHENKO ELENA	文 平谷	前川 智美
牧 信一	松田 恒紀	加藤 眞佐美	清水 建	川田 侑佳
久保田 さゆり	格 阿尔泰	近藤 和恵	斯日古楞	竹中 悠哉
MALIKOVA NATALIYA	高梨 明日香	リスニ	大津留 峻	宮 佳瑤
PHAN THUY THI THU	戸田 尚子	阿迪莱阿不都拉	伊原 健太郎	氏家 悠太
黒木 美日子	薛 蔚	張 セイ	中田 祥樹	山田 美悠
呂 維超	綿貫 登美子	滝口 翔	大場 文昭	洪 宇
安達 智洋	王 茜	趙 軼良	西嶋 良祐	KHASHBAT SARUUL
李 静	劉 海			

2012（H24）年度前半期学位授与式および修了者祝賀会

2012年9月28日、けやき会館において学位授与式が行われ、以下に掲載する1名の方が社会文化科学研究科を修了して学位（博士）を、3名の方が人文社会科学研究科博士後期課程を修了して学位（博士）を、1名の方が論文提出により学位(博士)を、4名の方が人文社会科学研究科博士前期課程を修了して学位（修士）を取得されました。

また、学位授与式後、人文社会科学系総合研究棟2階のグラジュエイトラウンジにおいて修了祝賀会が催されました（右写真）。



2012年度前半期社会文化科学研究科博士後期課程修了者（2012年9月）

氏 名	論 文 表 題	取得学位
吉永 耕介	食料需要構造の変化とその予測	博士(経済学)

2012年度前半期人文社会科学研究科博士後期課程修了者（2012年9月）

氏 名	論文表題	取得学位
村瀬 智之	knowing-Howと傾向性－統一的な理解とその意義－	博士(文学)
三村 達也	近現代日本における庶民住宅の史的考察－建築学者西山卯三の住宅研究を中心に－	博士(文学)
尹 相国	中国の国有企業の株式会社化－コーポレート・ガバナンス論の視点から－	博士(経済学)

2012年度後半期人文社会科学研究科論文提出による学位取得者（2012年9月）

氏名	博士論文題名	取得学位
大石亜希子	少子高齢化社会における女性労働と社会保障	博士(学術)

2012年度前半期人文社会科学研究科博士前期課程修了者（2012年9月）

遠津 有美子	岡野 冬香	杉山 裕美子	荒井 卓
--------	-------	--------	------

2012（H24）年度新規科目担当者

2012年度前半期の人文社会科学研究科新規科目担当者は以下の通りです。

課程	専攻	研究教育分野	職名	氏名	科目名
博士前期課程	地域文化形成	言語行動	講師	西住 奏子	日本語語用論 日本語語用論演習
博士前期課程	公共研究	共生社会基盤	准教授	鶴田 幸恵	現代文化論 現代文化論演習
博士前期課程	社会科学研究	法学基礎論	助教	佐伯 昌彦	法社会学 法社会学演習
博士前期課程	総合文化研究	言語構造	准教授	鎌田 浩二	理論言語学 理論言語学演習
博士前期課程	総合文化研究	人間行動	教授	阿部 明典	知識情報科学 知識情報科学演習
博士前期課程	総合文化研究	人間行動	准教授	山田 圭一	言語分析基礎論 言語分析基礎論演習
博士前期課程	総合文化研究	人間行動	准教授	清水 洋行	地域社会論 地域社会論演習
博士後期課程	公共研究	公共哲学	准教授	山田 圭一	現代知識論
博士後期課程	文化科学研究	比較言語文化	教授	梶田 幸栄	言語構造論

2012（H24）年度科学研究費新規プロジェクト

2012年度の新規採択は以下の通りです。

1) 代表者名 2) 2012年度予算額（単位は円。括弧内は間接経費を内数で示す。）

専任教員

基盤研究(C)一般

「地方自治体の再生可能エネルギー導入の現況把握と進捗度比較指標の開発」

1) 倉阪秀史教授 2) 1,820,000（420,000）

基盤研究(C)一般

「19世紀英領ビルマの現地人官吏と植民統治体制についての研究」

1) 岩城高広准教授 2) 3,120,000（720,000）

挑戦的萌芽研究

「学士課程教育における新しい教養教育モデルの創成」

1) 小澤弘明教授 2) 2,340,000（540,000）

若手研究(B)

「国家の成立・変動の司法的コントロール—政治的紛争概念の再評価—」

1) 藤澤 巖准教授 2) 1,170,000（270,000）

若手研究(B)

「中古車貿易における移民企業家の多民族ネットワーク形成に関する社会学的研究」

1) 福田友子助教 2) 1,560,000（360,000）

特別研究員

基盤研究(C)一般

「中間小説誌の研究—昭和期メディア編成史の構築に向けて」

1) 小嶋洋輔 2) 2,600,000（600,000）

挑戦的萌芽研究

「社会生物学における規範概念に対するデイヴィドソンの見地からの分析」

1) 尾形まり花 2) 1,300,000（300,000）

若手研究(B)

「『青い山脈』の系譜学」

1) 千葉 慶 2) 1,300,000（300,000）

若手研究(B)

「19世紀アイルランド総合大学新設による社会とナショナリズムの変容」

1) 崎山直樹 2) 1,300,000（300,000）

若手研究(B)

「賀川豊彦と同労者の社会事業にみる地域協働モデルの検討」

1) 伊丹謙太郎 2) 1,300,000（300,000）

日本学術振興会特別研究員（DC2）

特別研究員奨励費

「16世紀イベリア半島および西地中海地域におけるモリスコ」

1) 押尾高志 2) 900,000（0）

兼任教員

基盤研究(B)一般 海外における日本近現代史像の変容—学校教材を中心に—（三宅明正文学部教授）

基盤研究(C)一般 フランチェスコ・ディ・ジョルジョの芸術-15世紀後半シエナとウルビーノの芸術交流（上村清雄文学部教授）

基盤研究(C)一般 サイバー犯罪に関する国際的対応と情報刑法の体系化 (石井徹哉法経学部教授)

基盤研究(C)一般 戦前日本の府県別実質賃金の推計:1890~1930年代の農業部門の動向を中心に
(荻山正浩法経学部教授)

基盤研究(C)一般 就学前幼児と小学校低学年児童のための連携算数教育プログラムの開発
(松尾七重教育学部教授)

基盤研究(C)一般 保護観察中の性犯罪者の性的認知の特徴を踏まえた処遇方法の発展
(羽間京子教育学部教授)

基盤研究(C)一般 社会認識に基盤を置いたシティズンシップの実体化およびその再構築モデルの開発研究
(戸田善治教育学部教授)

基盤研究(C)一般 借用語音韻論の理論的研究 (田端敏幸言語教育センター教授)

基盤研究(C)一般 主観的輪郭の比較認知研究から探る知覚的体制化のメカニズム (牛谷智一文学部准教授)

基盤研究(C)一般 生活をめぐる地域ガバナンスの比較研究—地域交通政策を中心に—
(魚住弘久法経学部准教授)

基盤研究(C)一般 経済の不平等度の計測に対する統計的モデリングおよび計算機インテンシブ・アプローチ
(西埜晴久法経学部准教授)

基盤研究(C)一般 国際家族における教育戦略形成過程とそのメカニズムについての研究
(周 飛帆言語教育センター准教授)

挑戦的萌芽研究 理数系教員研修留学生の実践的指導力の向上をめざす研修プログラムの開発と評価
(藤田剛志教育学部教授)

若手研究(B) 近現代ロシア文化論の新たな構築--テキストと視覚芸術をめぐる総合研究
(鴻野わか菜文学部准教授)

若手研究(B) 被害者遺族による意見陳述が裁判官の量刑判断に及ぼす影響 (佐伯昌彦法経学部助教)

新学術領域研究(研究領域提案型) 裁判員裁判における量刑審理・評議の在り方 (佐伯昌彦法経学部助教)

2012年1~12月

人文社会科学研究所所属教員（兼担教員を含む）による出版物

**水島治郎 反転する福祉国家
—オランダモデルの光と影
岩波書店、2012年7月、254頁。**

本書は、オランダ現代政治を題材としながら、先進的な福祉国家において進行する「包摂と排除」のロジックを分析することで、現代民主主義の抱えるアポリアの解明を試みた研究書である。

本書ではまず、近年雇用改革・福祉改革が進み、国際的に「オランダモデル」の名で知られる現代オランダの政治経済変容を分析した。女性や高齢者、福祉給付受給者らの就労を積極的に促進し、ワークシェアリングやワーク・ライフ・バランスを通じて「包摂」を進め、新たな福祉国家モデルを構築しつつあるオランダの展開について明らかにした。

しかし他方、オランダでは、新右翼政党の台頭を契機に、移民・難民の排除が急速に進行し、血なまぐさい事件も続発している。そこで本書では、モデル視される「包摂」と並行して進む、この「排除」のプロセスにも注目した。そしてこの「包摂」と「排除」に通底するロジックとして「参加」の論理を指摘し、高度産業社会における「参加型社会」への転換が、一方では女性・高齢者などの就労促進を通じて「包摂」を促しつつ、他方では、「参加の可能性の薄い」移民・外国人への「排除」を招いていることを論証した。「参加型社会」における「コミュニケーション能力」の役割に注目し、オランダのみならず先進諸国で進展する「包摂」と「排除」の構造を明らかにすることで、現代の民主主義の抱える光と影を描き出すことを試みたのである。

本書については、幸いなことに『毎日新聞』『日本経済新聞』『エコノミスト』『信濃毎日新聞』など10紙(誌)で書評の対象となり、政治学はもとより経済・福祉・労働・社会学など、人文社会科学の諸分野の方々からもさまざまな反響をいただいた。またネット上ではツイッター、ブログなどで多数の言及をいただいている。当初刊行の2000部は半年で売り切れ、現在は二刷が流通している。学際的で自由な雰囲気の人社研、特に21世紀COEで学部・学科の垣根を超えて議論できたことが、自身の研究のあり方に計り知れない意味をもったことを改めて感じている。人社研を通じて交流いただいている皆様に感謝したい。



福田 友子 トランスナショナルなパキスタン人移民の社会的世界
——移住労働者から移民企業家へ
福村出版、2012年、337頁



日本に滞在する移民は、エスニック集団ごとにそれぞれ移民ネットワークを発達させ、独自の社会的世界を構成している。別の見方をすれば、ある種の移民コミュニティが形成されつつあると捉えることも可能である。国家の統制下における移民の制度形成はしばしば困難を伴う。しかしながら、そのような状況にあっても、移民は独自のルートで資源を動員し、着々と生活基盤を築く。それを受けて先行研究では、移民の「定住化」が重要なテーマとして論じられてきた。

しかしながら現代の移民は、グローバル化による人や情報の流れの簡便化を背景として、一つの地域だけでなく、複数の地域を国際移動しながら生活することが可能となっている。その複数の拠点の背景となっているのは、トランスナショナルな同胞の配置である。またこのような国際移動は、日本での永住権取得者に多く見られる現象でもある。本書で取りあげるパキスタン人移民のコミュニティ形成過程は、ホスト社会への志向性とトランスナショナルな志向性の二つを並存させつつ進行している。まさに両者が矛盾せずに並存するトランスナショナルな社会的世界である。

本書で得られた知見は以下のとおりである。まずパキスタン人移民の社会的世界において、もっとも特徴的なのは、そのトランスナショナルな社会領域の構築である。このような社会的世界を解明するためには、送出社会とホスト社会だけでなく、第三国の移民政策や社会的背景を見なければならない。また移民過程論の最終段階である永住の段階が、現代のパキスタン人移民社会的世界においては成立しないことが確認された。それは「終わらない移民過程」とも言える。ではパキスタン人移民にとって、日本は最終的に不要なのかと言えばそうではない。ホスト社会への志向性を持つパキスタン人移民の活動は、日本人配偶者女性、日本人ムスリム同胞、日本人の取引相手といったホスト社会のメンバーによって補完される。それは日本社会や世界各地の事象を巻き込んで展開していく、トランスナショナルな社会的世界の一部であり、こうした事例のは日本の社会学や移民研究に新たな研究視角を提示するものであると考えている。

博士後期課程修了生による出版物
(人文社会科学研究科・社会文化科学研究科)

辛大基 李箱と韓国モダニズム文学——「終生記」の作品論的分析——
一粒書院、2012年7月、302頁

本書は、2012年千葉大学大学院人文社会科学研究科に提出した博士論文「李箱『終生記』——李箱作品の集大成」を基に加筆、編集を行ったものである。「李箱」と言えば1930年代に活躍した作家で、新しい文学手法を導入した斬新な作品を発表し、モダニズム作家という評価を受けている。本書は、李箱の代表作「終生記」の分析を通じて彼のモダニズム文学の意味を確認するとともにその特徴を浮き彫りにさせ、彼とともに芽生えて発展した韓国モダニズム文学の実体を捉えようとしたものである。

第1章「『終生記』の構造と時間」では、複数の話者による多重構造という構造的な特徴を究明することに重点を置き、第2章「『終生記』の中のパロディ」では、語りの中に用いられた多くのパロディが主人公の痛切な心理状態を表現するのにいかに適し、作品全体を際立たせているかを明らかにしようとした。第3章「李箱小説の集大成としての『終生記』、そしてそのモダニズムの意義」では、「終生記」のモダニズム手法及び特徴を李箱文学の中にどのように位置づけるべきかを考察し、さらにそのような彼の文学が韓国近代文学史の中にどのように位置づけられるべきかについて考察を行った。



2012年1～12月
博士後期課程修了生の研究業績
(人文社会科学研究科・社会文化科学研究科)

金沢圭子

◆論文

喪主選定にみる「家」—毎日新聞と14県紙「訃報」欄からの考察—、
『家族社会学研究』、日本家族社会学会編、2012年、第24巻 第2号、177頁-188頁

博士後期課程大学院生の受賞・助成金
(人文社会科学研究科・社会文化科学研究科)

中西純夫

◆助成金

財団法人生涯教育開発財団 博士号取得支援事業 2011年 500,000 円

2012年1～12月

博士後期課程大学院生の研究業績
(人文社会科学研究科・社会文化科学研究科)

入江俊夫

◆論文

数学における問題と解決との関係と証明概念－『論理哲学論考』から『数学の基礎』に至るウィトゲンシュタインの数学の哲学の展開の意味、『科学哲学』, 日本科学哲学会, 2012年、45巻2号, 115頁～129頁.

発行者 千葉大学大学院人文社会科学研究科
発行日 2013年3月31日 Phone/fax 043-290-3574
gshss412@ml.chiba-u.jp